

## レヴィナスによるラカン

－ ウイグル族の「主体性」を理解するために －

西 原 明 史

The Linkage of Lacan and Lévinas:  
For Understanding the "Self-direction" of Uighur

Akifumi NISHIHARA

### Abstract

The purpose of this paper is elucidating the origin of the "self-direction" of Uighur. First of all, I hypothesized that Lacan's ego theory might be a model of the formation of the ego of Uighur. Because Lacan formulized the process of building up the positive identity. The point of this formula is that "the other" call "one" "It's you" first. In short, ego is given by someone. Besides I connected this formula with the ethics of Lévinas who had searched for "the way for the weak to be surely relieved". To be brief, this way is that "the weak" go ahead and show their affection to "the other", after that "the other" show "the weak" their affection in return. I noticed if both of "the weak" and "the other" are Uighur, this mutual "exchange of affection" certainly is realized. In this way, I arrived at a conclusion that Uighur might obtain their confidence and pride through this "interaction". After all, Uighur solved their problem themselves. I think that on account of this, Uighur can accept that they are citizen of China and that they are in a disadvantageous position because they are minority of this country.

キーワード 新疆ウイグル自治区, ラカン, レヴィナス, 「シエーマL」, 「顔の彼方」

### はじめに

新疆は今、一体どうなっているのだろう。今年に限っても、3月には雲南省の昆明駅で、5月には新疆ウイグル自治区のウルムチ駅や同じウルムチ市内のバザールで、いずれも大規模なテロ事件が発生している。それを受けて、「チェチェン、パレスチナ紛争のような泥沼化を懸念する声が上がっている」<sup>1</sup>だの、「中国政府は『テロに対する人民戦争』を戦うと強調した」<sup>2</sup>だのとい

<sup>1</sup> 2013年3月11日、『MSN産経ニュース』, 「新疆ウイグル自治区がパレスチナ化？」から。  
(<http://sankei.jp.msn.com/world/news/140311/chn14031109440002-n1.htm>)

<sup>2</sup> 2014年7月2日、『MSN産経ニュース』, 「少数民族から『言葉』を奪う中国“人権踏みつけ政策”」から。  
([http://sankei.jp.msn.com/west/west\\_affairs/news/140702/waf14070207000002-n1.htm](http://sankei.jp.msn.com/west/west_affairs/news/140702/waf14070207000002-n1.htm))

う報道も一部に見られた。昨年は1年間で50件あまりのテロが起きたというし<sup>3</sup>、遠く日本で見聞きするニュースからは情勢の最悪化しかうかがえない。

私が最後に新疆を訪れたのは昨年(2014年)の3月である。その際、例えば「漢族はウイグル族のタクシーには乗らないし、逆にウイグル族は漢族のタクシーに決して乗らない」などという噂を耳にした。民族間の対立が深まっていることを予想させるが、しかし私がウルムチの空港から市内に向かう際に拾ったタクシーの運転手はウイグル族だった。そして特に何も気にしてない風だった。私の容姿はもちろん漢族そのものなのだが…。また、無数の人と車であふれかえる、喧噪と活気に満ちた自治区首都ウルムチの市内の様子はいつもと何も変わらなかった。デパートの入り口には手荷物を検査する守衛が立っていたが、その仕事ぶりは気のないものだったし、同じ多くの人が集まるホテルはフリーパスだった。

もちろん全く変化がなかったわけではない。以前ならウイグル族の客引きや露天商がたむろしていた場所に人っ子一人いなかったのは少し違和感を感じたし、日が落ちると公安の車両が気のせい目立って見えた。しかし職場のオフィスでも、ファーストフードの店でも、漢族とウイグル族は当たり前だが一緒に働き、レストランに入ると普通にテーブルを並べていた。ざっと市内の雰囲気を観察した限りでは、つつがなく日常生活が繰り返られていた。「人民戦争」といった言葉で形容されるようなとげとげしい雰囲気を感じさせるものは、少なくとも表面には出てきていないと感じたものだ。

では、繰り返しになるが例えば日本のメディアが、「民族対立は激化するばかりだ」「強硬な少数民族政策に対する反発は強まるばかりだ」「豊富な天然資源を漢族が独占しウイグル族との格差が広がるばかり」<sup>4</sup>と強調するような事態の最悪化は、ウイグル族たちの心の中でどのように受け止められ処理されているのだろうか。彼らの立場に置かれれば、不満や不信、怒りや憎しみといった感情を抱くことは避けられないはずだ。それを直接に表すことが許されない現状に悲しみや絶望を感じ、無気力になってもおかしくはない。もしかしたら、これが市内に見られる上記の平穏さの理由なのだろうか。余計なことは考えず、語らず、ただ粛々と日々の暮らしを続けていくことで、自分の暮らしを守ろうとしているのだろうか。

しかし、この誰でも想像できるようなありがちな解釈をウイグル族に当てはめるには相当に無理がある。というのも、私に言わせれば、彼らは職場でも街の中でも常に「大きな顔」をしているからだ。それは何も政府や漢族への反発から敢えてそうしているというわけではなく、自然体としてそうなのではあるまいか。一言で言えるものではないが、例えば職場のリーダーであればリーダーらしく厳格に、商売人なら商売人らしく気前よく、農民は農民らしく勤勉に、若者は若者らしく奔放に振るまっているだけのようにも見えるからだ。

職業や立場や年齢に応じた行動を裏付けるのは「社会化」だ。ウイグル族は社会から「求められていること」がわかり、それを満たしているという自負があるのだろうか。だから生き方に引け目や負い目を感じず、自信や誇りといった肯定的な自己意識を持つこともできる。それが彼らの快活さや活発さを呼ぶ。日本のメディアで描かれるウイグル族のありようとはやはり違うのである。

<sup>3</sup> 2014年5月23日、『中央日報日本語版』、「中国国家主席『テロとの戦い』宣言翌日、新疆で最悪爆弾テロ」から。(http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140523-00000007-cnippou-kr)

<sup>4</sup> いずれも2014年5月26日、『東京新聞』社説、「中国新疆の爆発 弾圧では負の連鎖続く」から。(http://www.tokyo-np.co.jp/article/column/editorial/CK2014052602000131.html)

暴動や襲撃、爆弾事件に自爆行為と、これまでになくテロ事件が頻発している新疆。その背後には政府による抑圧や弾圧、搾取があるとされているが、そうした情勢の中でウイグル族が維持し続ける自尊心や承認感はどこから、どうやって生まれているのか。本稿ではこの問いかけについて考察する。

そのために以下のような方法で進めていきたい。それは私自身のアイデンティティ形成過程の分析である。自分の経験ならば色々と思い出すことも多い。つまり資料が豊富である。例えば私は20代の半ばで初めて新疆を訪れ、それからずっとこの地に関わってきたが、そのことが私の人生における変わらぬ拠り所、社会に対して誇れるアイデンティティになっている。こうしたポジティブな自己意識はいかにして獲得されたのか、ということについて振り返ってみたい。次にそれを基にしてアイデンティティ形成の一般的なメカニズムを定式化する。最後にそれをウイグル族の自尊心や承認感が生み出されるプロセスを解明するために応用する。以上が本研究の全体的な流れである。

## 1. 新疆 と 私

私と新疆の出会いは1990年の夏に遡る。それから20数年、ほぼ毎年のように当地を訪れ、そこに住む人々と交流を続けてきた。なぜそこまで新疆にこだわることになったのだろう。改めて思い返してみると、「この地を理解したかった」という一言に尽きる。それにしても私はなぜそれを望んだのか。もちろん文化人類学者として、研究対象である新疆の文化の起源や社会の成り立ちを知りたいという学術的興味からであることは間違いない。また、研究業績を上げたいという欲もあったと思う。古代シルクロードの末裔たちを取材しているという歴史的壮大さに酔っていた部分も否めない。しかしどれも「強いて言えば」という程度のものだ。本当のところは、彼らに深い親近感を抱いたからなのだ。初めて訪ねたとき主に滞在したのは首都のウルムチであったが、そこで出会い、お世話になった人々の優しさにすっかり魅了されたため、としか実は言いようがない。論文という媒体に似つかわしくない情緒的な表現だが、本当にそうなのだ。

逐一フィールドノートに留めたエピソードをここで詳しく振り返るわけにはいかないものの、一つ二つ紹介するくらいは許されるだろう。印象深い出来事の一つにこんなことがある。新疆の少数民族の一つ、シボ族の方にインタビューするためご自宅を訪問した際、目当ての官舎を探し当てたと思って玄関で来意を告げたところ、出迎えてくれたその人は迷うことなく私たちを招き入れてくれた。そしてあれこれと世話を焼き、話が始まったところで、実は人違いであることが判明したのである。たまたまこの人もシボ族だったのでお互い勘違いすることになったわけだが、先方に見ればとんだ迷惑だったろう。得体の知れない外国人が突然「話を聞かせてくれ」とやって来たのだから。しかし彼はそんな素振りも見せず私たちを歓迎してくれたのである。シボ族というより、中国の人の心の広さというか、細かいことにこだわらない鷹揚さを目の当たりにして、「これはすごいところに来た」と改めて感じ入ったことを覚えている。

せっかくなのでもう一つ挙げておこう。この最初の調査で知り合ったある大学の先生が、学生たちとの座談会を開催してくれたことがあった。夜、教室に入った瞬間目に飛び込んできたのは、コの字型に並べられた長机に沿ってずらりと座る学生たち。中には艶やかな民族衣装を身につけた人もいて、雰囲気を一層華やかなものにしていて。大きな拍手で私たちを迎えてくれた彼らは、はにかみながらも興味津々で日本について質問してきたのである。また、自分たちの夢を

しっかりと聞かせてもくれた。会もたけなわになると、今度は自慢の民歌や伝統舞踊などを私たちに披露してくれる。ウイグル族を始めカザフ族、モンゴル族、シボ族など少数民族ばかりだったが、皆、こういうときのための「レパートリー」を用意していたようだ。それに比べて「これが日本」という持ち合わせのない私たちは、当時中国でよく知られていた「北国の春」を歌って大いに喜ばれ、何とか面目を施すことができたという次第であった。

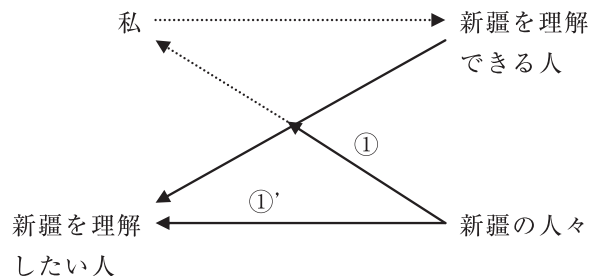
この座談会を企画し、通訳も務めてくれた先生は漢民族の方だが、控えめながら終始隅々まで気を配り、楽しい雰囲気を出してくれたことも忘れられない。終了後はみんなが校舎の外まで私たちを見送って名残を惜しんでくれた。家路についた私たちの頭上にはたくさんの星が瞬いており、日本から遠く離れた中央アジアの街でこんなに楽しいひとときを過ごせたことへの感慨を一層深いものにした。因みに最後の一文はその日私が帰宅してから記した当時の日誌からの抜粋である。

そういった体験が積み重なったこの1ヶ月余りの滞在で、私は新疆にすっかり「はまった」。しかしこのときは中国語がほとんどできなかったので、言葉を通してその素晴らしさを知ったわけではない。だから新疆の人々が何を考え、どのように生きているのかなどまだ何もわからない。それにもかかわらず、ここがどうしようもなく好きになってしまったのである。言葉は介在していないわけだから、理屈抜きで、言い換えれば頭で考えた結果ではなく、いわば感覚的に親しみを感じたと言ってもいい。街並み、ざわめき、人いきれ、におい、食事。そんな五感で把握できるもの全てに当てられてしまった結果なのだろう。とにかくその理由ははっきりしないままに、新疆を「私がいるべき場所、いることを許されるどころか望まれる場所」だと思い込んでしまった。今思うと気恥ずかしいくらいだが、新疆が「私を招いている」とすら感じたのである。

こうして私は「新疆を訪れ、取材を行う資格がある数少ない日本人」という誇らしい自己意識を手に入れることができた。「数少ない」としたのは、このとき私と共にこの地を訪れた若手研究者たちは一人として「また新疆を訪れたい」とは言わなかったからだ。そのため私はなおさら「なぜか私だけが受容してもらえた、気に入られた」と本気で思うことができた。以上が私のポジティブなアイデンティティ形成にまつわるエピソードの概要である。そして、これがアイデンティティの形成過程を定式化するための良い事例になるのである。

## 2. ラカンの「シェーマL」

さて、私が1章で紹介した思い出話を下図のように整理してみた。これが「私」のアイデンティティ形成過程を定式化する鍵となるのだが、まずはこの図の読み取り方を説明しよう。すでに述べたように、「私」は何の根拠もなく、とにかく感覚的に「新疆の人々」に「受容された」気がした。言い換えれば、「またここを調査に訪れてもいいと見なされた」と直観的に思ったわけだ。だからこそ私は「新疆を理解したい」と強く願うこととなる。くどい言い方をすると、「新疆の人々に受容されたため、新疆を理解したいと心から願う人」という自己イメージを得た



(図1)

わけだ。図の左下に来るこれを自我と呼んでもいいだろう。このように「自我は与えられる」ということを明瞭に示したのがこの図1なのである。

私が自分一人で妄想的に自我を作ったのではなく、先に「新疆の人々」から「あなたはここに来てもいい（だって私たちを理解できる人なのだから）」というメッセージ、要するに「あなたは新疆を理解できる人だ」という呼びかけが届いたからこそ、私は「新疆を理解できるような人になりたい」と思った。まずここから自我形成のプロセスが始まったという意味を込めて、①という番号を図に書き込んでおいた。

ではなぜこのメッセージが途中から点線に変わったのか。私はこのメッセージを受け取ったと「直観した」と同時に、「新疆を理解したいと心から願っている人」という自我を持つ「新しい私」になる。すると図中の「私」は左上ではなく左下の位置にいるわけなので、その場所で上記のメッセージを受け取ったはずだ。①を付けた矢印でそれを表している。このことを強調するため、まだ今のような自我を持つ者としては存在していなかった「私」に向かうラインを曖昧なものにしたのである。

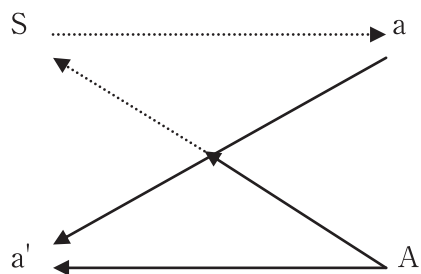
また右上から左下に向かう矢印は、「新疆の人々」による私宛メッセージの中にある「私についてのイメージ」を基に私の新しい自我が創られたということを示している。そして「私」からその「私についてのイメージ」へと伸びた矢印は、「私」がそのイメージと自分を同一視しようとしたことを意味する。点線なのは、前段で述べたように「私」はすでにどこにも存在していないことを暗示するためである。

要するに「新疆の人々」から「あなたは新疆を理解できる人だ」と呼びかけられた「私」が、それに応えて「私は新疆を理解したいと心から願う人だ」という自己像を持つことを喜んで受け入れた、という自我形成のプロセスを図解しているわけだ。また、呼びかけが届いたのは私だけだったという理由で、私は一種の「選ばれしもの」としての優越感を抱くことにもなる。ポジティブなアイデンティティはこうして生み出されるのである。

言うまでもないことだが、ここまでの説明には元ネタがある。上に図示した時点で想起された方がいるかもしれない。これはフランスの精神分析家、ジャック・ラカンが「シェーマL」という名で提示した、「コミュニケーションを構造化」した図なのである（ドール、1989：178）。それはまた「主体の同一性を構成するこの自我という外形」<sup>フォルム</sup>（ドール、前掲書：178）を表したものでもあり、それを参考に私の自我形成過程を図式化してみたのである。理解が極めて困難な図であったため、まずは私というわかりやすい具体例を用いて「シェーマL」の見方に慣れてもらったというわけだ。これを使って実際にウイグル族の自我を考察するつもりなので、次は「シェーマL」の用語も含めてきちんと解説しておこう。

この図でいうSはもちろん先ほどの「私」に相当する。このSが「新疆の人々」に重なるAから「あなたはaだ」というメッセージを受け取る。その時Sはそれを受け入れ、できるだけaと同一視しようとする。その結果、このaに近い自我ができあがるため、a'という記号が用いられている。こうしてa'という自我を獲得したSは、その瞬間からa'として存在し始めることになるのは言うまでもない。

ここで何より大切なことをもう一度繰り返しておこ



(図2)



う。それは、「自我は誰かから与えられる」ということである。私が先に「新疆の人々」から「私のなるべき姿」を与えられたように、私たちは、私たち以外の誰かがいて初めて「何者かになることができる」。ラカンが、この命題をより厳密な形で表そうと、「シェーマL」を考案したのではないだろうか。

因みにこの「シェーマL」の「先駆的段階」（ドール、前掲書：136）にあたり、最もわかりやすい例でもあるのが、有名な「鏡像段階」である。乳児が鏡に映った自分の姿を見て「これが私」と認識することで、「私」という自我を芽生えさせる時期のことだ。生後6ヶ月から18ヶ月くらいまでの頃に起こるといふ（バルミエ、1988：27）。では、鏡というものが何かすらまだ全くわかっていない乳児が、他ならぬ「鏡の中の像」に惹きつけられるのはなぜか。そこには母親が関与している。彼女から子どもに届けられた「ほら、鏡のなかの、あそこにいるのがお前ですよ」というメッセージが決定的な役割を果たして、子どもはそこに自己の像を認めることができるのである（佐々木、1987：30-31）。

この「胸像段階」では、母親が「シェーマL」の中のA、鏡に映った像がaで、Sである子どもがaに自分を同一視して、a'という人生最初の自我を手に入れるということになる。自我の確立はその起源からもう「他の誰か」に依拠しているのである。解説書では、ラカンの「シェーマL」が「間主観的弁証法」とか「相互主観性の弁証法」などとよく呼ばれている（例えばドール、前掲書：137、バルミエ、前掲書：56）。それは、私と他の誰か、すなわち「他者」との相互作用を経て、初めて自我が立ち上がるということがこの図に明瞭に示されているからであろう。

そして、こうした「相互主観的」なプロセスで誕生する自我にはもう一つの重要な特徴がある。それは、この自我が「主体的」に引き受けられた結果生まれたということだ。上述したように、私は新疆の人々が私に与えたイメージを「進んで」受け入れたし、乳児にしても、側にあるぬいぐるみなどではなく、鏡の像という平面的なものを自分と同一視した。他の選択肢があるにもかかわらず、「躊躇なく」母親の示唆に従ったのである。他者からのよびかけに自分から積極的に応えるこうした振るまいは、「主体的」としか言いようがない。そう、「シェーマL」は「主体」が生み出されるメカニズムでもあるのである。

「主体的」に選び取った自我であれば、その行為自体にも、そうして得られた自我に対しても自信を持っているはずだ。また、そもそもそうした主体性の源には、「他ならぬ私宛に呼びかけてくれた」という承認感があつた。私の場合も、鏡像段階の子どもにしても。自信や承認感といえば、いずれもウイグル族の自己意識に欠かせない要素であった。従って、彼らもまたラカンの「シェーマL」という図式に則ってその自我を構築している、という仮説を基に話を進めることは十分可能であろう。

となれば、気になるのはウイグル族に「喜んでそれに同一視したい」と思わせる自己イメージを与えたのは誰かということである。またその自己イメージとは一体どんな内容を持つものなのだろう。「シェーマL」でいう「A」や「a」を解き明かしていくのが次章のテーマになる。

### 3. 他者とは一体誰か

ラカンはそもそもこの他者Aをどのようなものと見なしていたのか。まずはそれから考えていきたい。彼はAのありように「未知性」という言葉をあてがっているようだ（ドール、前掲書：181）。また、「還元不能な絶対者」とも呼んでいる（ドール、前掲書：182）。わかりやすい意味

を自分なりにあてがうことが許されないということだろうか。Aとの関係の中で私たちは自我を見出すはずだが、それが誰なのか全くわからない。おまけに「こういう人だ」と勝手に解釈してもいけない。にもかかわらず、そのAとの間に呼びかけと受容というコミュニケーションが成り立っているというのが、「シェーマL」なのである。

例えば「鏡像段階」を想起してみよう。生後間もない子どもは、「ほら、それがあなたですよ」と呼びかける相手が母親だとはもちろん認識していない。まだ「母親」という概念も何もない時期なのだから。しかしそんな「未知」の存在からやって来たメッセージを迷うことなく受け入れていた。私もそうだ。言葉が不自由で「新疆の人々」について何も知らなかったのに、「あなたは新疆を理解できる人だ」という彼らの呼びかけに嬉々として従った。なぜこんなことが生じたのだろうか。

「知らない人」からの呼びかけに喜んで従うのはこういう場合しかない。その人が自分にとって「何かわからないけど自分にとって特別だ」とそれこそ直観的に感知した時だ。いつも熱心に、そして優しく声をかけ続けてくれる存在、生理的な欲求を満足させてくれる存在。赤ん坊にすでにそう直覚されていたからこそ、母親のまなざしは影響力を持った。私にしても、新疆の社会や環境からの感覚的な刺激に心地よく酔わされていたため、そこを何度も訪れることになる自分を想像できた。

端的に言えばこういうことだ。「どこか自分に優しい」「どうも愛されているようだ」、そう感じたからこそ「未知」の他者から送られた言葉を受け入れられた。そう感じているからこそ、「一体この人は誰なのか」などと自分なりにあれこれ解釈することもなく、無条件で従うことができた。「還元不能」とは恐らくそういうことだ。ラカンがイメージしていた他者Aとは、「優しさ」や「愛」を示す人だったのである。そもそも、そんな人に「あなたはこういう人です」などと勝手に意味付与することは冒涇だとすら言えよう。それは自分の認識枠組や価値観を他者に強制するに等しいのだから。このいわば「不可侵性」ゆえに、ラカンは他者を「絶対者」と呼んだのであろう。

ここまでの論考をまとめると、他者とは「優しさ」と「愛」を与えてくれる「不可侵」の存在、ということになる。私たちはそんな他者の呼びかけに応えることで「主体」となり、ポジティブなアイデンティティを形成することができるのである。それにしてもそんな「他者」がウイグル族にいたのだろうか。ちょっとにわかには思い浮かばない。むしろ「敵」ばかりのような気さえする。

ウイグル族の宗教、言語、文化に対する政府の抑圧は報道でもすっかりお馴染みだし、そんな政府や国家のマジョリティである漢民族とうまくいくはずがない。一方で意外と知られていないが、同じムスリムの少数民族である回族やカザフ族に対するウイグル族の偏見には根強いものがある<sup>5</sup>。また中東のアラブ民族に対しても軽蔑を隠さない<sup>6</sup>。こう見れば、ウイグル族にとっての他者はどうやらイスラーム関連でもないことがわかる。では、ウイグル族を「優しさ」と「愛」で癒すのは一体誰なのだろう。それを探し当てるためにはもう少し的を絞らなければならないように思われる。

そこで「他者」の性格をさらに続けて検討してみたのだが、そうするとこんな疑問が浮かんできた。それは、なぜこの「他者」は「優しさ」や「愛」を感じさせることができたのか、ということだ。何の理由も背景もなくそうすることができる人のことを普通は「博愛主義者」と呼ぶが、さすがにそれはない。すでに述べたように、私と同行した研究者たちは私以外に誰も「新疆

の人々」に強い親近感を感じなかったのだから。では、一体どういう脈絡の下で「優しさ」と「愛」を届けることになるのだろうか。

そういう情愛が交わされる場と言えどももちろん家族だ。これを素材にして考えてみたい。例えば私自身のことを言えば、私は息子として父や母からの情愛を一貫して直観してきた。しかし、では私がそれを受けるに値するほど親の期待に添った生き方をしてきたかという点、遺憾ながら全くそうではない。それでも両親が私に対して「優しさ」と「愛」を示し続けてくれたわけは、私がまず何より彼らの子どもだったからである。そうとしか言いようがない。一方、父親としての私を考えてみれば、私の息子は私が親としてどんなに失格であっても、決して見放さないでくれる。私は彼の私に対する親しみをやはり直観できるのである。では、私に変わらぬ「優しさ」と「愛」を与えてくれる私の両親や息子にとって、私とは一体どんな存在なのだろう。最も相応しい言葉を考えてみた。意外かもしれないが、それは「弱者」である。

子どもは幼いうちは親に全面的に依存する。その意味で弱い。しかし長じても私の場合は親の期待に応えきれていないという負い目から、肩身の狭い思いや申し訳ないという謝罪の念を抱き続けたため、どうしても下手に出ざるを得なかった。つまり弱い立場に自らを置いたのである。親は親で子どもに対しては責任ある立場にある。子どもの健やかな成長を何より優先させなければならぬという意識は親なら誰もが持っているはずだ。自分の方が後回しという意味で、やはり弱い立場と言わざるを得ない。そういえば新疆を初めて訪れた頃の私は右も左もわからない外国人であり、正真正銘の弱者であった。私は息子としても父親としても、そして旅人としても、「他者」の情愛を感じたときは間違いなく「弱者」の立場にいたのである。

以上の考察から、他者の前で「弱者」であったことがその「優しさ」や「愛」を引き出すきっかけになったと言ってもいいのではないだろうか。これが、他者の情愛が感知される脈絡だったのである。とすれば、他者の立場も自ずから明確になるはずだ。目の前にいるのが「他者にとっての」弱者なのだから、当然他者は相対的に「強者」あるいは少なくとも「非弱者」ということになる。つまりウイグル族にとっての他者は、誰か「強い人」「弱くない人」なのだ。見方を変えれば、ウイグル族は誰かを「強化」し、その「代わりに」情愛を与えられていると言うこともできよう。

もともと少数民族であり、中国という国家の中では政治的にも経済的にも、そして文化的にも弱者の立場にあるウイグル族は、本来少しでも「強くしてもらわなければならない」立場にあ

<sup>5</sup> 例えばこんな笑い話を何人ものウイグル族から聞いたことがある。「一人の回族はムスリム、二人なら半人前のムスリム、三人いてやっと一人前のムスリム」。回族は言語も容貌も漢族と違わないため、他に誰もムスリムがいなければ平気で漢族の食堂に入り、豚肉を食べる。二人いればどうしようかと話し合って結局は食べる。三人いてやっとムスリムの戒律を守る気になる。彼らはそれほど不熱心なイスラーム教徒なのだという批判がこの言葉には込められている。回族の側も同様で、ウイグル族の反国家意識の強さに対して批判的な意見を持つ人は多い。同じ宗教なのにお互いの心理的な距離は驚くほど遠い印象がある。もちろん都市部では各民族それぞれのモスクがあり、礼拝の際はそこに通う。

カザフ族についても同様だ。現在では農耕民族であり、商売にも長けたウイグル族から見ると、草原や山間部での遊牧にこだわってきたカザフ族は「遅れている」とか「洗練されていない」というイメージがあるのだろうか。そんなカザフ族に対し、ウイグル族は「野蛮」「不潔」といった言葉で形容することがある。

<sup>6</sup> ウイグル族はアラブ地域のムスリムを「naqar」（ナチャル：劣っている、正しくない）と呼ぶ。彼らの言葉を借りれば、「アラブでは部族や国家同士の争いが絶えないし、戦争にテロと乱れきっている。しかも小さな面積しかないイスラエルにアラブ諸国が東になってかかって勝てなかった。」そういう体たらくのために、「ナチャル」という言葉が使われるのだという。



る。ところが私のここまでの推論では、わざわざ誰かを「強くしてあげる」方に回っているということになってしまった。どうも話がこんがらがってしまったようだ。少し間を置いて冷静になるためにも、章を改めることにする。

#### 4. レヴィナスとラカンの接合

私はラカンの「シェーマL」がウイグル族のアイデンティティ形成を解明するための重要なモデルになると見当をつけた。そこで、この図に込められた意味を私なりに読み解き、解説を加えてきた。その過程で「他者」の存在が鍵になっていることがわかり、他者性について考察を進めてきた。そして「優しさ」「愛」「不可侵性」などが「他者」に必須の特徴であり、それは「他者」によって「主体」になる「以前の」私の、「弱者」という立場があってこそ示されるものであるということまで明らかにできた。

もうおわかりのことと思うが、私は「シェーマL」の範疇からいつの間にか逸脱してしまっている。「シェーマL」は「他者」の呼びかけから始まっていたが、私は今やその「他者」が一体どこから来るのかを想像しているわけだから。「他者」がその他者性を獲得する瞬間の光景を思い描いたとき私にかいま見えたのは、他者の前に立つ「弱者」であった。そして、その人が他者によってやがて「主体」になる。「シェーマL」以前に端を発するこうした関係はもちろん私が独創的に析出したわけではない。ラカンと同じフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスが与えてくれた示唆を基に検討した結果なのである<sup>7</sup>。

レヴィナスの「弟子」を自認する内田樹によれば、彼は、「他者」が他者として、「弱者」が「主体」として立ち現れる以前の、言い換えれば両者が具体的な相貌を表す前の段階を「顔の彼方」と呼び（内田、2011：322）、そこでの「起源的な出来事」を想像しようとしたのだという。なぜか。それはレヴィナスが「他者の他者性・未知性を毀損することなく、他者とかわかることは可能か」を問い続けていたからだ（内田、2011：59）。ユダヤ人でナチスのホロコーストの生存者でもあるレヴィナスにとって何より必要だったのは、お互いに何者かわからないままでも無条件で救いの手が差し伸べられるための根拠であった（内田、2013：174）。

これはどこかで聞いた言葉だ。あのラカンが想定した他者もまた「未知」で「還元不能」な、つまり損なうことが許されない存在ではなかったか。そんな他者との間のコミュニケーション、すなわち「かかわり」を図式化したのが「シェーマL」だった。二人はまるで同じことをテーマに考察しているように私には思える。ここから、レヴィナスによる「他者論」の射程はどこかでラカンの「他者論」に重なってくるという確信を持ち、「シェーマL」の中の他者を理解するためにレヴィナスを適用したのである。

私は家族を事例にして他者による情愛の起源を考察し、それを他者と弱者との対峙であろうと特定した。家族の中で互いに情愛を受け合う親も子も、見方によっては他方に対して弱い立場にあることから「弱者」という共通項を提示したわけで、これは帰納的にたどり着いた結論ではある。しかしその前に私は、『「私」と『他なるもの』の結びつきは相互に超越的な両者の不平等性から始まる』というレヴィナスの言葉に出会っていた（内田、前掲書：324）。

<sup>7</sup> 正確に言えば、フランス思想の研究者、内田樹の一連の著作によって媒介されたレヴィナスの発言や思索を参照している。

「不平等」ということだからそこには「強弱」のような関係がある。そこで私は、まず最初に他者の前に立つ者ももしかしたら「弱い人」なのでは、という仮説を立てることができた。また、その成員が根源的というか理屈抜きで、つまり「超越的」に不平等な関係にあるものといえ、まず何より「親子」であろう。こうして、上述のような事例を連想することができたのである。

このように私の論考はレヴィナスの思想を応用しながら進めていることを確認した上で、前章から持ち越した課題に戻りたい。それは社会的に「弱い」存在であるはずのウイグル族が、さらに「弱い」立場に立って、別の誰かを「強くしよう」としている倒錯的な振るまいの理由であった。一瞬慌ててしまったのだが、一息入れて冷静になり再度考察してみると、それほどおかしい話ではないことがわかる。

全ては最終的にウイグル族が自己肯定感を得るためのものだとすれば、彼らがまず弱者として立ち現れることは一つの戦略として功を奏することになるからだ。彼らに「同情」した他者が情愛と期待を示せば、それに主体的に応えることで自尊心や承認感を確かに獲得できるのである。しかし話はそう簡単ではない。これは実は危険な賭けでもあるからだ。考えてもみよう。いくら「弱い立場」に立ったからといって、「他者」がそれに応じて情愛を示してくれるとは限らないではないか。

実際、内田はレヴィナスの「挨拶」という何気ない日常行為に関する分析<sup>8</sup>を受けて次のように述べる。『「挨拶」を贈るものは、『パロールの贈り物』が『あなた』に届かず、届いても黙殺されるという『リスク』をあらかじめ引き受けている』。しかし、この文章はこう続いている。「私は自分の脆弱な脇腹をまず『あなた』に曝す。『あなた』は私を傷つけることができる、私は『あなた』によって傷つけられようと告げつつ、『挨拶』は贈られる」（いずれも内田、前掲書：82）。この「挨拶を贈るもの」はなぜリスクを顧みず自らを曝し続けるのか。なぜ「脆弱な脇腹を」曝し続けるのか。要するにそこまでして「弱者」であり続けようとする理由は何なのか。

内田によると、レヴィナスの哲学とは「『どうあっても目の前にいるこの人に倫理的にふるまってもらわないと生きていけない人間』の側から振り絞るように出てきた思想」なのだという。だから「切実さが違う」（いずれも内田、2013：175-176）。いわゆるホロコーストを生き残ったユダヤ人だからこそ、いかにすれば「弱者」が救われるかを、必死にそれこそ身をよじるようにして考え続けなければならなかった。そして彼が「絞り出した」結論が「弱者の立場に身を置くこと」なのだとすれば、それこそが「弱者が救われる」ために必要な行為だということになるはずだ。しかし一体どう考えれば、「弱くあること」がそのまま「弱さから救われること」へと転化するのか。

こう考えてみてはどうだろう。少し話がそれるが、レヴィナスは「自由の最後の可能性」を「対話を始める能力」のうちに見出したのだという（内田、前掲書：137）。自由に考え、語ることのできる人間は、もちろん「弱者」ではありえない。ではどうすればその余地を絶対に確保できるのか。つまり、どんな政治体制でも、どんな状況に置かれても「自由」であるためには、言い換えれば「弱者」にならないためにはどうすればいいのか。そんな問題意識で思索をめぐらせたレヴィナスがたどり着いたのは、何と「過去の私」と「今の私」の間の対話であった（内田、前掲書：136）。

<sup>8</sup> レヴィナスは挨拶に関し、こう述べている。「私があなたに向かって『こんにちは』という時、私はあなたを認識するより先に、あなたを祝福していたのです。私はあなたの日々を気遣っていたのです。私は単なる認識を超えたところで、あなたの人生のうちに入り込んだのです」（内田、2011：8）。

例えば「テレビを見るのは一日1時間以内」と決心した私が、「過去の私」だとしよう。三日後の今、私がこのルールを黙々と守っているとすれば、少なくとも「今の私」は決して自由の身ではない。なぜなら過去の私が決めたことに無条件に従っているのだから。しかし、もしここで「なぜ私は今このルールに従わなければならないのか」ということについて、仮想的な「過去の私」と問答することになれば話は変わってくる。この対話に参加した「過去と今」の二人の私は、二人だけの世界において「開放的な対話」を展開することができるはずだ。つまり自由を確保できる。言葉を代えれば「弱者」ではなくなっているのである。

「それは心の中の個人的な独白にすぎない」、などとばかにすることはできまい。何度も言うがホロコस्तを生き延びたレヴィナスなのだ。彼は社会も人生も一瞬のうちに暗転することを身を以て知っていたに違いない。最悪の事態に巻き込まれても、ぎりぎりのところで救われるための「最後の手段」のようなものを求める切実さは、私たちの想像をはるかに超えているだろう。「過去と今の私の間の対話」も、そんな状況下での「なげなしの自由」として提案されたものなのかもしれない。実際、このアイデアが「弱者が弱者になることによって救われるとはどういうことか」という上述の疑問にヒントを与えてくれるのである。

ある他者の前でウイグル族が「弱者」の立場に身を置くとき、その他者は「強者」に、あるいは少なくとも「非弱者」になる。そしてそのままウイグル族に対して情愛を示してくれれば、弱者であったウイグル族も誇りを持った主体となる。「シェーマL」に沿ったこの理想的な流れを確実なものにできる他者がたった一つだけ存在する。それはまさに「最後の手段」としか言いようがないが、同じ「ウイグル族」なのである。

「私」という一つの枠内で括れる「過去と今の私」が誰にも邪魔されることなく「自由に」対話できたように、同じウイグル族同士ならウイグル族だけの世界で「開放的な対話」を行うことが可能だ。他方の存在に一目置き、その発言に耳を傾ける「オープンマインド」なコミュニケーションは、同じ民族間であればより容易に成り立ちうるだろう。そうすれば確かにウイグル族が全体として「強くなれる」。

ただし絶対に外せない条件がある。もう一度繰り返すが、ウイグル族の中の誰かが先に「弱者」の立場に回ることだ。その結果、ウイグル族が全体として救われる。これが「弱者が弱者であることによって救われる」という困難が実現されるための唯一の理路なのである。

## 5. ウイグル族の「顔の彼方」

ウイグル族は、中国という国家レベルで見ればマイノリティの立場にある。しかし、体制という「長いもの」に巻かれながらも、一定のポジティブな生き方を保持し続けている。20年を優に超える新疆での取材経験を通じて、私はそう実感してきた。それを譲るつもりは決してない。そこで、彼らのそうした生き方を支えるものが何かということについて、彼らの宗教や社会関係、あるいは国家や漢民族との関係から繰り返し探求してきた<sup>9</sup>、本稿もその一環である。今回はラカンやレヴィナスを援用しながら進めてきたが、やっとの事で「発見」できたのが、あえて弱

<sup>9</sup> 例えば漢民族との関係については「裁きから赦しへ - ウイグル族の語りを『症候』として読む -」（『安田女子大学紀要』第40号、113-126、2012）で、宗教に関しては「受難の行方 - ウイグル族と神のいないイスラーム -」（『生活デザイン学会誌』第3号、2-17、2013）にて、そしてウイグル族の社会関係については「生き延びるための学びに向けて、今、人類学にできること - ウイグル族における共生の倫理から -」（『安田女子大学紀要』第41号、125-138、2013）にて、詳細に検討している。

者の立場に立つことで他のウイグル族を持ち上げ、そんな彼らとの関係の中で自らもまた「主体」として引き上げられるという複雑な「救済の回路」の存在であった。

といっても、まだ結論に達したわけではない。もう一つ問題が残っている。あえて弱者の立場を引き受けるウイグル族とは一体誰なのか、ということだ。先に他者とは「不可侵なもの」と定義したが、それは「安易な意味づけ」、言い換えれば「自分の認識枠組による考量」が許されない存在だということであった。このことはつまり、他者と「後に」主体となる弱者とが全く異なる「認識枠組」を内面化している、ということをも物語っている。同じウイグル族の中で、そんなに大きな違いを持ったグループが存在しているのだろうか。

実はある。都市部に住むいわゆる「知識人」と、近郊の農村に暮らす人々の間で比較的明確に線を引くことができるように私には思われる。前者は官公庁やその外郭団体、あるいは教育機関や国有企業に勤める「国家幹部」と呼ばれる公務員たちだ。それをやめて小規模なビジネスを行う者も含まれる。彼らは専門学校以上の学歴があり、共産党員であることも多い。国家が高等教育修了者に職業を分配していた90年代末頃までに社会人となった者たちという言い方もできる。世代的に言うと30代後半以上の人々だ。公用語である漢語にある程度以上堪能で、職場では漢族とも机を並べ、普通にきちんとつきあっている。

イスラームについては、モスクに通い礼拝を行うことは規則でできないが、そのことを特に不便とも負い目とも感じていないように見える。そんな彼らとつきあっていて気づかされるのが、上述の「近郊農村に暮らす人々」との親密な関係だ。このカテゴリーには農民だけではなく、中国の地方行政単位である県や鎮、郷などの政府関係者も含まれる。私は新疆東部にある地域中核都市の哈密を拠点に調査を続けてきたが、そのとき頼りにしたのは上記知識人たちである。彼らのコーディネートで農村などをしばしば訪れたわけだが、一体いつどうやって知り合ったのかと不思議に思う程、どこにも親しい友人がいた。

訪問先にはどこで聞きつけたのか、事前に連絡していたのか、とにかくあつという間に関係者やら友人やらが集まってくる。哈密から離れた実家に行こうものなら、街角でたむろしているウイグル族たちの中には必ずと言っていいほど知り合いがいて、そこでひとしきり話し込むことになった。逆に彼らもしばしば哈密にやってくるようで、私の現地滞在中の飲み会などでは、しばしばそういう人が宴席に加わったものである。そういう「知識人」らだけに親族との絆も強い。

「知識人」たちの中には、首都ウルムチで学んだ後、国家公務員となって都市部に居住し始めたという地方の農村出身者も多く、そんな人たちは親や親族間で頻繁に行き来している。哈密は小規模な都市で、マイカーなど特に必要もないような街なのだが、近郊に住む親族を訪ねるだけのために購入した人も私の友人にいた。またムスリムとしての彼らはことのほか葬式を大切にすが、出身地で葬式があれば直接の面識がなくてもできるだけ参列しようとする。知り合いならなおさらだ。

他にはこんなこともある。ウイグル族の2大例祭であるローズ節（断食明けの祭り）やコルバン節（犠牲祭）の時には彼らは必ず実家に帰るのだが、その際ピティラ（pitira）と呼ばれる寄付を行い、その地域に住む困窮した人々を助ける活動に加わっている。最近はどうでもなくなったそうだが、以前は地方の親族を訪ねる際には、古着や食用油など入手しにくい品物を持参したとも聞く。こんなこまめな交流の積み重ねが、農村地域に住む人々の信頼を獲得することにつながっているのだろうか。

緊密な交流を展開する両者だが、その生活スタイルや価値観はかなり違う。「知識人」たちは



生活の基盤が都市部にあり、消費社会に馴染んでいる。経済水準も比較的高く、中国の著しい経済発展と歩を合わせており、今更そこから離れるわけにはいかないだろう。上述のようにイスラームについてもそれほど深くこだわっているわけではなかった。一方の地方だが、農民や公務員らの生活水準や消費社会の浸透具合について言えば、かなりの遅れを取っているのは事実だ。ウイグル族だけの農村に住んでいれば漢語を全く使わなくても生活していけるようで、漢語がほとんどできない「中国人」にしばしば出会って驚かされたこともある。

イスラームについてはその差異を一般的に評価することが難しいのだが、哈密地区の地方行政区には、村を挙げてイスラームに没頭する地域もいくつかある<sup>10</sup>。またウイグル族は病院などではなく、生まれ故郷で死を迎えたいという意識が強く、臨終の間際に実家に戻ることが多い。そのため葬儀を執り行うのは農村のイマーム（礼拝の主宰者）になるケースが増え、結果、彼らの存在が都市部より身近になることはあるだろう。またこのイマームは農村部では特にそうなのだが、日頃から地域住民の事情を把握し、人間関係のトラブルなどが起こればそれを調停する役割を果たしている。そういうことを考え合わせれば、イスラーム信仰に対する真摯さは農村に住む人々が都市部の知識人のそれを上回っている可能性は高い<sup>11</sup>。

要するに、体制に順応しているのが都市部の「知識人」で、地方の農村部では必ずしもそうではないわけだが、両者の関係は密接で良好なのである。こうした両者の組み合わせから、あの「シエマ」を読み取ることはそれほど難しいことではない。自ら農村部に頻繁に出かけ、寄り添い、できるだけ便宜も図る。相手が訪ねてくればそれなりに迎える。そんな「知識人」たちの行為は「先に下手に出る」という意味で、私の目にはまさに「弱者」と映る。そして彼らを温かく迎え入れる「地方の人々」は情愛を示しているわけだから「他者」だ。ということは、知識人たちは他者である農村部の人々が期待する役割を自我として引き受けることになる。それは一体どういうものか。

それは恐らく「今のまま知識人として生きること」なのだ。私はある「知識人」から、「自分たちは『維奸』(weijian:ウイグル族の裏切り者という意味で新疆では使われている)だ」という自虐的な言葉を耳にしたことがある。しかし彼らがウイグル族社会で実際にそう見られているとは到底思えない。社会各層への彼らの顔の広さやそこでの親密ぶりはすでに述べた通りで、むしろ十二分に信頼されている。つまり「知識人」たちは全く異なる生活スタイルや価値観を持って生きる人々から、「あなたはそのままがいい」と呼びかけてもらっている。そのおかげで失いかけた自信を取り戻し、承認されたことの喜びを持って自分の生き方を改めて引き受けることができているのではないだろうか。これが彼らの「主体的なアイデンティティ形成」なのである。

<sup>10</sup> 哈密地区の西部に位置する五堡(ウブ)村などは、中東と見まがうくらい熱心なムスリムが多い。女性は皆スカーフで顔を覆い隠しているし、男たちもしっかりあごひげを伸ばしている。実際サウジアラビアに留学して帰ってきた者もいるという。都市部の知識人たちに言わせると、いわゆる「イスラーム原理主義者」だという。子どもたちが学校から帰宅したとたん、ラジカセにスイッチを入れてイスラーム関連の宗教音楽を聴き始めるという光景に私も出くわしたことがある。

<sup>11</sup> ただ、都市部の高学歴の若年層にイスラーム熱が高まっているのも事実だ。彼らはイスラームの教えに忠実で、酒も一切飲まないし、インターネットを駆使して、イスラームの世界的な潮流にも詳しい。自宅でもこっそり礼拝を行ったり、「ローズ節」(いわゆるラマダン)の時期には数日だけでも断食を行ったりする。ここ数年、哈密の繁華街でも酒類を一切出さない飲食店が目に見えて増えている。特に新たに出店したおしゃれな高級飲食店などは全てそうだ。恐らく新しい感性を持った若手のウイグル族実業家の手によるものと思われる。



逆に「地方のウイグル族」から同じシナリオを読み取ることもできよう。都市生活者として現代化し、その暮らしを維持するために体制に適応して生きている我が子や友人、従兄弟たちを彼らはいつでも受け入れているし、イスラームに対する態度についても批判がましいことなど恐らく一切口にしないはずだ。「知識人」たちに連れられて数多くのイマームや農村の古老たちを訪ねたが、彼らはいつも初対面でも私たちを温かく迎え、インタビューにも丁寧に答えてくれたのだから。そんな風にやはり「下手に出る」地方の人々に対し、知識人たちは彼らの「昔ながらのウイグル族」的な暮らしぶりを取り上げて精一杯の敬意を表するのである。コーディネーターに案内されてそういった方面の取材を行っている際にしばしば感じたことだ<sup>12</sup>。

だからこそだろうか。農村部で年配の農民らに取材していると、自分の開墾した土地の広さを自慢する勤勉な方もいれば、「子どもは大学を出て国家機関に勤めている」という誇らしげな語りを聞かされることもまた珍しくなかった。両方の要素を含んだ語りにも出会っている。恐らく「他者」である知識人が期待する生き方には2種類あったのだろう。ウイグル族のいわば民族的生業でもある農業で成功することへの期待と、都市で自分たちの仲間になることへのそれ。いずれにせよ、知識人が彼らに抱く像をまさに自分たちのものとして積極的に引き受けていたのである。「地方のウイグル族」もやはり「主体的なアイデンティティ形成」に成功していると言えよう。

こうして見ると、二つのカテゴリーにおおざっぱにまとめられたウイグル族たちは、それぞれ「他者」になったり「弱者」となったりしながら、互いに情愛を示し、相手に呼びかけを行っている。その中身は相手の存在を認めるものもあれば、上記のように自分の生き方を提案することもあったのかもしれない。どっちであれ、その呼びかけは好意的に受け取られ、彼らが自我を主体的に構築していくきっかけとなった。ウイグル族が示すポジティブなアイデンティティ、その背景には以上のようなメカニズムが働いていたのではないだろうか。これがレヴィナスの言う「顔の彼方」で起こっていた起源的な出来事だったのである。

## おわりに

本稿のテーマはウイグル族の肯定的な自己意識の源を明らかにすることであった。そこで、自我を主体的に獲得するという意味でポジティブなアイデンティティを確立できる経路を示したラカンの「シェーマL」が、ウイグル族の自我形成のモデルに成り得るのではないかという仮説を立ててみた。またそこに「弱者が必ず救われる道」を探求してきたレヴィナスを接合することで、ウイグル族内部におけるウイグル族同士の「情愛の交換」が彼らの自信や誇りを生み出しているという結論に最後はたどりつくことができた。それは、こういう風に言い換えることもできよう。「結局、ウイグル族の問題はウイグル族によって解決するしかない。」

実はレヴィナスもそう考えていた。彼にとっての「弱者」はまず誰よりホロコーストを経たユダヤ人であったはずだが、そのユダヤ人が救われるための理路として彼が提示したのは、「善が

<sup>12</sup> 調査時に私がお世話になったのは、博物館や新聞社に勤務するなど元々伝統文化に関心が高い人たちだったのでそうだったとも言える。しかし、メディア上でウイグル族の文化に関する様々な著作物を発表する彼らは、そのおかげで知識人を超えて商売人らにまで一定の尊敬を勝ち得ていた。そのことを考えれば、都市部のウイグル族も一般的に言って彼ら自身のルーツに関する関心は高く、従って伝統的な生活スタイルや観念を保持している人々への敬意もまたそれなりに存在すると言っていい。

勝利しえない世界に自力で善を創り出す」という「倫理感」であった（内田、2013：166）。「自力で」、つまりユダヤ人自身によって彼らに降りかかった苦難を克服するべきであると述べたのである。何もしてくれない神を恨むのではなく、誰か他の人が助けてくれるのを待つのもなく、「それならまず私だけでも」と言って「善を創り出すために」自ら立ち上がる人をこそレヴィナスは求めたわけだ。そして、そんな積極性、唯一無二性を備えた人を彼は「主体」と呼んだ。

現在の中国においてウイグル族がある程度の民族的苦難の中にあることは私も否定できない。しかし、だからといって絶望の中に打ちひしがれているわけでは決してないし、怒りや恨みといったネガティブな感情に突き動かされてテロ事件を引き起こす者たちがそれなりの影響力を持っているというわけでもない。日常を生きるウイグル族の多くはウイグル族としての自信や誇りを持っている。それは本稿で述べてきたように、ウイグル族一人一人が民族としての受難の痛みを癒すために貢献している「主体」であることを自覚しているからなのかもしれない。だからこそ中国の公民であること、その中のマイノリティであるがゆえに不利な立場にいることを受け止めることができているのである。

## 付 記

本稿の基礎となる資料の多くは、平成23～25年度文科省科学研究費補助金基盤研究（B）（研究課題名：「現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究」、研究代表者：西原明史）による現地調査の実施によって収集されたものである。また調査にあたっては、新疆ウイグル自治区哈密地区文化局非物質文化遺産保護センターのサマット・アスラ所長、哈密地区教育委員会の馬軍さんを始め、多くの方々にお世話になった。いちいちお名前を列挙することは差し控えるが、この場を借りて深く感謝申し上げたい。

## 引 用 文 献

- ・内田樹、2011、『レヴィナスと愛の現象学』、文藝春秋。
- ・内田樹、2013、『内田樹による内田樹』、140B。
- ・佐々木孝次、1987、『甦るフロイト思想』、講談社
- ・ドール、ジョエル、(Dor, Joël), 1989、『ラカン読解入門』、小出浩之訳、岩波書店。
- ・バルミエ、ジャン＝ミシェル、(Palmier, Jean-Michel), 1988、『ラカン 象徴的なものと想像的なもの』、青土社

[2014. 9. 25 受理]